演題名　頭蓋咽頭腫および中枢神経原発胚細胞腫瘍患者における能力の自己認識
—本人・家族の Patient Competency Rating Scale（PCRS）を用いた検討—

演者氏名　田畑 阿美
所属先　京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻

・筆頭著者・共著者の氏名
田畑 阿美(OT)[1)], 上田 敬太(Dr)[2, 3)], 梅田 雄嗣(Dr)[4)], 植野 司(Dr)[3, 5)], 駒木 美紗(OT)[1)], 丹治 正大(Dr)[6)], 峰晴 陽平(Dr)[6)], 舟木 健史(Dr)[6)], 荒川 芳輝(Dr)[6)]

・全著者の所属施設
1) 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
2) 京都光華大学看護福祉リハビリテーション学部言語聴覚専攻
3) 京都大学大学院医学研究科精神医学
4) 福井大学医学部病態制御医学講座小児科学
5) 京都大学医学部附属病院総合臨床教育・研修センター
6) 京都大学大学院医学研究科脳神経外科学

・抄録本文
【背景】頭蓋咽頭腫，中枢神経原発胚細胞腫瘍などの間脳に好発する脳腫瘍(間脳腫瘍)では，生命予後が良好で，かつ，病巣が内分泌中枢に隣接するため，長期的にホルモン補充療法等の自己管理が必要となる場合が多い。後天性脳損傷に伴う自己認識障害は，治療の遵守と機能的転帰に影響する要因である(*Douglas et al., 2016; Prigatano et al., 2005*)。その一方，間脳腫瘍患者における能力の自己認識の特徴は不明で，治療終了後の患者・家族の支援の必要性については，十分な検討がなされていない。本研究では，間脳腫瘍患者における能力の自己認識の特徴と患者・家族の認識の差に関連する要因を検討し，医療専門職による支援の在り方を考えることを目的とした。
【方法】対象は京都大学医学部附属病院通院中の間脳腫瘍患者と家族で，神経心理学的合併症の評価として，WAIS-IV 知能検査(WAIS-IV),ウエクスラー記憶検査，遂行機能障害症候群の行動評価(BADS)，Apathy Scale，ベック抑うつ質問票(BDI-II)，新版 STAI 状態−特性不安検査(STAI)を実施した。また，自己認識の評価として，Patient Competency Rating Scale(PCRS)の自己・他者評価を実施した(倫理委員会承認番号: R2052)。PCRS は 30 項目 4 尺度(ADL，対人関係，認知，感情)の質問票で，自己－他者評価の差が大きい程，能力の認識に差があることを示す(正の値: 本人の過大評価，負の値: 他者の過大評価)。患者・家族間の比較は Wilcoxon の符号順位検定，認識の差に関連する分析では Spearman 順位相関係数を算出した(有意水準両側 5%)。
【結果】20 組の間脳腫瘍患者(平均年齢 35.2±14.0 歳)と家族を対象に解析を行った。患者・家族間の比較では，PCRS 合計・対人関係・認知・感情の他者評価が自己評価と比較して有意に高い結果を示した。認識の差に関連する分析では，合計は WAIS-IV(処理速度)，ADL は WAIS-IV(処理速度)・BDI-II，認知は STAI(特性不安)，感情は WAIS-IV(処理速度)・BADS(年齢補正した標準化得点)と有意な負の相関を認めた。
【結論】間脳腫瘍患者は，家族と比較し，自己評価が低い可能性が示唆された。また，処理速度や遂行機能が良好な場合や，抑うつ，特性不安が高い場合は，患者・家族の認識に差が生じやすい可能性が示唆された。間脳腫瘍患者の支援にあたる医療専門職は，明かな機能障害や他覚的な困難さを認めない場合でも，患者の自覚的な困難感を評価し，実動作の確認や家族に対する説明・指導を含めた支援を行うことが期待される。